



ISSN 0385-0838

第 131 号

発行所

亜細亜大学アジア研究所  
東京都武蔵野市境5-24-10

電話 0422 (54) 3111

郵便番号 180-8629

# フィリピン政治情勢混迷の構造

野沢勝美

フィリピンのアロヨ政権の政治基盤は弱く、国内政治の不安定化が表面化している。二〇〇七年以降だけでも、同年一〇月のエストラダ前大統領に対する六年六月ぶりの特赦、一月の反乱兵士によるホテル占拠事件、加えての二〇〇八年二月のデベネシア下院議長の解任がそれである。この背景には二〇一〇年の大統領選挙を視野に入れたフィリピン政界の様々な思惑がある。本稿は以上進行中の事態を中心にアロヨ政権の政治不安定要因を明らかにして今後の政治動向を展望する。

## 政権の正統性に対する疑念が根底に

アロヨ政権が直面する基本課題は政権の正統性に対する批判から生じてきた。二〇〇一年一月にエストラダ大統領の不正蓄財疑惑に抗議す

る「ピープルパワー2」によってアロヨが副大統領から大統領に昇格したがこのこと事体が政権の正統性に疑念をまねいた。第一に、アロヨは選挙の洗礼を受けずにレイエス参謀総長、陸海空の三軍の司令官のエストラダ大統領不支持という超法規的手段により大統領に就任した点である。第二にエストラダ大統領に対する不正蓄財の弾劾裁判そのものが下院で却下されておりアロヨ昇格の根拠はなくなったとの点である。これらの批判を払拭すべく、アロヨは二〇〇四年大統領選挙に出馬した。この結果一〇〇万票の僅差をもってしたが勝利したものの、その後の展開で正統性に対する新たな疑念を浮上させることになった。そして次の二点がその根拠である。第一に大統領選挙開票作業中に中央選挙管理委員と電話会談した事実が選挙不正介入

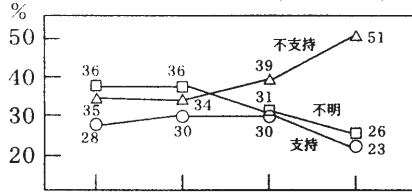
## 目次

フィリピン政治情勢混迷の構造	野沢 勝美	(1)
台湾の医療事情と小児医療	岡崎 幸司	(4)
タイと日本 姓名に対する意識の違い	谷津 清美	(6)
「国際中堅企業」の登場	西澤 正樹	(8)
ASEAN 経済共同体とは何か	石川 幸一	(10)
ASEAN の発展	石川 幸一	(12)
FTA 自由貿易が	石川 幸一	(12)

と非難された点である。第二にアロヨの夫と長男による賭博上納金疑惑の表面化である。この結果アロヨ政権の主要閣僚など一〇人が辞任した(主要閣僚辞任に関しては本所報第一一九号参照)。加えて選挙結果不正操作疑惑でアロヨに対する下院弾劾裁判手続きが開始した。かかる政権の足元が揺らぐ政治危機はこれに乗じた不満勢力による政権攻撃を現出させることになった。アロヨ政権下で二度目の反乱事件となる二〇〇六年二月のクーデタ計画発覚である。アロヨは非常事態宣言布告で事態を乗り切ったが、非常事態宣言はマルコス政権期の一九七三年以来であり内外に政権不安定を喧伝する結果となった(非常事態宣言に関しては本所報第一二三号参照)。

政権運営の不手際は支持率に反映する。民間

(図) アロヨ政権に対する世論調査(PulseAsia)結果



(出所) <http://www.pulseasia.com.ph> (2008年4月10日)

(表) アロヨ政権下の将兵反乱事件(2003 - 07年)

2003年8月27日	オークウッド・ホテル占拠事件
国軍武装将兵300人が国軍上層部を批判、大統領、国防長官、国軍情報部長の辞任を要求し近代的商業地マカティで反乱。首謀者はトリリアネス大尉。	
2006年2月24日	クーデタ計画発覚で非常事態宣言
クーデタ計画では、近代的商業地マカティの反政府集会にレンジャー部隊、海兵隊部隊が加わり、集会でアロヨ大統領不支持を公表、臨時政府樹立を宣言するというもの。首謀者は陸軍スカウト連隊司令官リム准将、海兵隊司令官ミランダ准将ほか国軍幹部将校。一部将兵がボニファシオ基地内司令部に武装終結。アロヨは非常事態宣言布告(24日)、同宣言解除(3月3日)。	
2007年11月29日	ペニンシュラ・ホテル占拠事件
国軍武装将兵など約100人が大統領の辞任を要求し近代的商業地マカティで反乱。首謀者はトリリアネス上院議員、リム准将。国軍装甲車のホテル突入で鎮圧。アロヨは5時間の夜間外出禁止令をマニラ首都圏、ルソン島中南部に発令(30日)。	

(筆者作成)

調査機関が公表した世論調査の結果ではアロヨ政権に支持率は二〇〇七年一〇月現在で最低レベルの三〇%にあり不支持率は三九%と前七月の調査より五ポイント悪化した(図参照)。

これらの悪材料のなか二〇〇七年五月の中間選挙結果は、上院(改選議席二二)ではエストラダが率いる野党連合七人に対し与党連合は三人無所属二人であった。非改選議員(与党六、野党五人)を加えると野党一二人、与党九人、無所属二人となり野党が過半数を確保した。エストラダに対する高い人気を知るアロヨは前大統領支持派や野党の政治的反撃にとまどっているというのが正直なところであろう。

### エストラダ大統領の特赦

かかる政治状況のなかでアロヨ大統領は二〇〇七年一〇月二六日にエストラダ前大統領を特赦した。特赦の理由は、エストラダが母親の看病に専念する、選挙による公職を求めない、としたことを考慮したとした。アロヨ

は、おもて向きには国家統合へ導く必要措置と表明しているが、特赦は前大統領の政治的影響力に配慮したものである。エストラダの不正蓄財に関して公務員犯罪特別裁判所が終身刑の判決を下したがエストラダの有罪はアロヨ大統領にとっては政権の正統性に対するお墨付きを得たことになる。これまでエストラダの法的決着がなかったことが前述のように正統性問題を浮上させてきた。弾劾裁判が中断されたことで決着こそなかったが、憲法の枠を超えた政権の継承性に関して最高裁は二度にわたってその正統性を追認している。すなわち最高裁は法的にはこの問題は決着をつけたが、問題は法律的決着ではなく政治的決着が残されているのである。こうした国民感情を背景にエストラダは公務員犯罪特別裁判所に異議を申し立てており、再審請求が却下されれば最高裁に上告する構えである。

二〇〇七年選挙でみせたエストラダ大統領の現実的役割からしてエストラダ支持派は有力な

政治勢力となろう。一族をみて、二〇〇一年には夫人のエルシエントを上院で当選させた。次いで息子のジーンゴイも上院議員となった。もう一人の息子のJ・V・エルシエントは上院出馬を断念して前大統領の意向で父親の地元サンファン町長選に回ったとされる。一九八七年エストラダ本人の上院議員当選を含め一族で四人の上院議員を送り出すという史上前例のない事態が生ずる。

エストラダ特赦を経済界はどうみているのであろうか。エストラダ特赦に関して対応は二分されている金融界など近代セクターを抱えるマカチ・ビジネスクラブは特赦を拙速として、外国投資への悪影響に懸念を示した。一方、地場産業の会員からなるフィリピン商工会議所は特赦受け入れの声明を発表し対応は割れた。

### 反乱兵士のホテル占拠事件

以上のような政治状況下で、二〇〇七年一月二九日に、公判中のアントニオ・トリリアネス元海軍中尉(二〇〇三年八月反乱事件の主犯で現上院議員)およびダニロ・リム准将(前述の二〇〇六年二月のクーデタ計画の主犯格)が裁判所から脱走し、反乱兵士ら三〇名と共に高級ホテルのペニンシュラ・マニラを占拠し、アロヨ大統領の退陣を要求した。

即日夕刻に国軍は装甲車で突入、立てこもっていた反乱兵らは投降したものの、これはアロヨ政権下での三度目の反乱事件となった(表参照)。占拠したホテルから国軍兵士や市民に不正で、かつ正統性のないアロヨ政権の打倒を呼びかけたものの、反乱側に呼応した大規模の集

会や国軍兵士による造反の動きは起こらなかった。しかし、大統領府は事態を重視し、一月二十九日深夜から翌朝までの五時間、マニラ首都圏に外出禁止令を布告した。

度重なる国軍将兵の反乱事件に背景には、アロヨ政権と癒着する国軍上層部への不満がある。これへの対応はこれまでも注目されてきた。

国家警察当局の発表では、投降した一〇二人の兵士らを逮捕し、うちトリアナス上院議員ら三五人を反乱罪で起訴した。一方、反乱事件は別の騒動を引き起こした。ホテル内で取材中のテレビ局など報道関係者約三〇名を反乱扇動・教唆容疑で警察官が手錠をかけて首都圏警察本部に連行したのである。国家警察による強権的な対応は、メディアによる政府批判を高める結果をもたらした。現地紙フィリピン・デイリー・インクアイラーのアルマンド・ドロ

ニラ主筆は、「反乱者をして捨てる行動に駆り立てた不満は、軍内部に鬱積している。」とした。今回の特徴はメディアに強権を發動する治安部隊の慢心を大統領府が制御できなかった点にある。国軍内部には、権力獲得目的の反乱の芽を肥大化するに事欠かない不満が充満している。同主筆が「次ぎは大統領府で銃撃戦がある」と警告し、「アロヨは、ペニンシュラ・マニラで解き放たれた近衛隊の銃によって人質になった」と論評したが、むべなるかなである。

### デベネシア下院議長の解任

以上のような政治混迷は立法府をも巻き込んだ。二〇〇八年二月五日、フィリピン下院本会議はホセ・デベネシア議長を突如解任した。解

任決議の理由は、前日に同議長が本会議でした現政権の汚職腐敗批判を内容とする演説が与党内の反発を招いたことにあった。すなわち、政府ブロードバンド網(NBS)構築事業にアロヨの夫が関与した汚職疑惑をデベネシア側が告発するなど大統領一派との確執の表面化が端緒である。

デベネシアは一九九二年ラモス政権発足と同時に下院議長に就任し、少数与党であったラカスを「虹の連合」なる与党連合にまとめあげる功績があった。以来九五年、二〇〇一年、二〇〇四年の計四期一二年の議長職にあり、今回が五期目で、途中九八年大統領選挙に副大統領候補のアロヨと組み大統領選に出馬したがエストラダに敗れている。アロヨ政権発足後は、与党ラカスの総裁として政権を支えてきた。とりわけ、前述の二〇〇五年大統領選挙結果操作疑惑でのアロヨに対する弾劾裁判の進行に際しては、デベネシア下院議長の政治手腕でこの弾劾告発を葬り去った経緯がある。かくも政権維持に貢献があったデベネシアの議長解任をなぜアロヨは容認したのであるのか。結論的には、長期に下院を支配してきた政界実力者を排除し、側近で固めた政権運営を企図したのである。

下院議員二二五名のうち解任賛成が一七四名と圧倒的多数であった。うちラカスが五六名、カンピが四二名であった。とりわけラカスの下院議員八二名の半数超が賛成に回りラカスは分裂した。一方、カンピは全員が賛成した。カンピはアロヨの側近政党で、ラカスとの与党連合形成に礎石役を果たしてきた。解任劇が顕在化させたのは、第一にカンピが与党連合第二位

に急成長したこと、第二に「虹の連合」に加盟の弱小政党を反デベネシアで統合させたことである。

後任議長としてはアロヨの信任厚いとされるノグレス議員が選出されたが、新議長の役まわりは、第一に下院に多数派を形成し弾劾告発から大統領を防御すること、第二に主要法案の成立促進である。これで二〇一〇年までの二年半の安定的政権運営が可能と自賛している。

しかしながら、このことは下院改革である予算配分公平化・透明性確保、従前から糾弾されてきた利益誘導型予算の廃止、下院委員長職の政党配分の公平性などの先送りを意味しよう。

以上のようにフィリピン政治の先行き不透明の根底には、アロヨ政権の正統性に対する疑念を大義名分とする反政府政治勢力の不満がある。アロヨが恐れるのはピールパワーによる政権不支持と議会における弾劾訴追である。結局、アロヨ大統領が事態收拾に期待するのは治安部隊を指揮する国軍幹部であり、議会の多数派勢力を形成するアロヨと党の形成である。しかしながら政治安定を優先させることが諸課題の先送りとなり、国民の意志からの離脱につながる。二〇〇八年三月実施の世論調査結果では政権支持率は二三%と危機水域にある(図参照)。二〇一〇年次期大統領選挙までいかに政権与党が国民の支持を回復することができるのか。アロヨ政権の抱える課題は深刻である。

(四月一〇日記)

(のざわかつみ・国際関係学部教授)